

佳作

ゆづきをくれたおともだち

茨城県 日立市立大沼小学校一年 水越 紫麗

ことし、わたしはしょうがくせいになりました。四ねんまえにいまのいえにひっこしてきたあとも、ひたちなかしのほいくえんにかよっていて、たくさんのおともだちとまいにちたのしくあそんでいました。そつえんしきのひ、みんなはおなじしようにがっこうにいくのに、わたしだけひたちしのしようにがっこうにいくことをしました。はなれてしまうんだ、もうあえないのかな、ときゅうにふあんなきもちになりました。しらないひとばかりでだいじょうぶかな、ほかのひとはもうおともだちになっているのかな、ずっとほいくえんのままがいいな。にゅうがくまでのあいだ、うれしいような、はじまってほしくないような、なんだかへんなきもちですごしたことをおぼえています。

にゅうがくしきのひ、たのしみだけどきんちょうしていました。そのひははずかしくてだれにもはな

しかけられないままいえにかえりました。しかしつぎのひ、わたしにとってしんじられないことがおこりました。おなじクラスのこが、

「おともだちになろう。」

とはなしかけてくれたのです。

「やった。はじめてのおともだちだ。」

すぐうれしくて、ふあんなきもちはふっとんで、ほっぺとこころがいつきにやわらかくなりました。それからじぶんからはなしかけられるようになって、いまではやすみじかにたくさんのおともだちとあそんでいます。

しょうがっこうをふあんにもっていたわたしにとって、はじめにはなしかけてくれたことは、たのしくやっていけそうとおもえるスタートボタンになりました。わたしにゆづきをあたえてくれて、かんしゃしています。これからのがっこうせいかつが、たのしみでしかたありません。